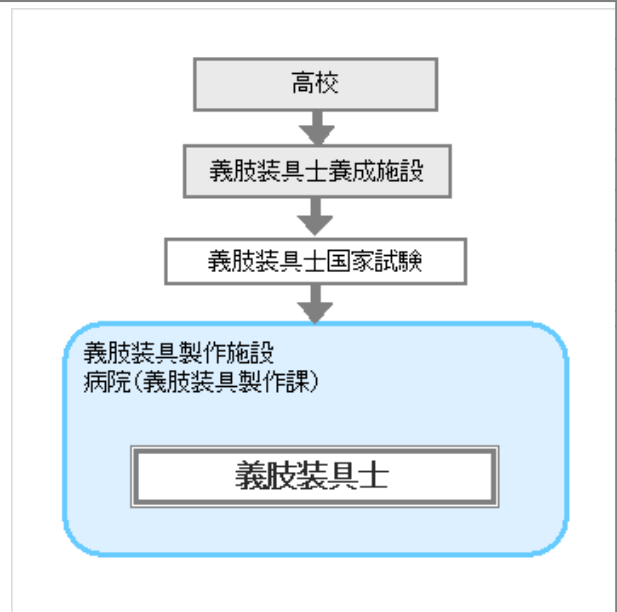


どんな職業か

身体の一部や機能を失った人が使う義肢や装具を作る。
 事故や病気などで身体の一部を失った人が使う義手や義足などを「義肢」といい、まひや変形など身体の一部の機能が失われた人が使う医療具を「装具」という。医師の指示を受けて、機能的で患部に負担をかけない義肢装具を製作するのが、義肢装具士の役割である。
 義肢を作る場合、まず切断端の骨の形状や体重がどこにかかるかを観察し、凹型モデルを型採りする。そのモデルにギブス泥を注入して凸型モデルを作り、修正を加える。凸型モデルをもとに、プラスチックでソケット（手足などの断面を納める部分）を作り、荷重のかかり具合を考えて、最も合理的に体重を支えられるようにソケットと義肢の各部分を連結するアライメント（軸位決定）を行う。次に本格的な製作に入り、半完成状態の義肢を実際に使用する人の身体に装着し、具合の悪いところを調整して仕上げる。
 装具を作る場合は、採寸して凹型モデルと凸型モデルを作り、製作に入る。最近では一部に既製品化されているパーツを利用することも多くなっている。
 患部に負担をかけない義肢装具は、障害のある人の活動範囲を広げ、その能力発揮を助けるなど、生活の質の向上に役立っている。

就くには

高校卒業後、義肢装具士養成施設で学び、国家試験に合格して義肢装具士の資格を得る必要がある。
 経験と熟練が重要な仕事であることから、終身雇用で定年がない製作所も多く、技術を磨いていけば独立して開業することも可能である。
 患者には個人差があるため、幅広い専門知識と高度な技術、医学だけでなく工学的知識が必要である。理学療法士や作業療法士などと協力することも多い。
 人体という完成された形を再現する造形的なセンス、身体の一部として正しく機能させる工学的技術も必要となる。



労働条件の特徴

職場は義肢装具製作施設に勤務する人が多い。病院内に義肢装具製作課が設けられているところもある。
 就業者の大部分は男性であるが、養成校在学中の生徒には女性も多く、今後の進出が期待される。熟練技術を必要とする仕事なので、アルバイトやパートは少なく、ほとんどが正社員である。
 一施設あたり平均して10人程度が働いているが、このうち「義肢装具士」の資格を持ち、障害のある人に接して採型・適合・調整などを行っているのは約半数である。残りは製作のみに携わっている。
 納期に間に合わせるために、残業や休日出勤をする場合もある。
 製作作業には、支柱を止める穴をあけるボール盤、材料を削るカービングマシン、材料を磨くサンディングマシンなどの工作機械を用いる。
 四肢切断の主たる原因は、1950年代までは戦傷、産業災害や交通事故による負傷など外傷によるものが大多数を占めていたが、現在では糖尿病などによる血管障害、悪性腫瘍が急速に増えている。高齢化社会を迎え、今後も義肢装具士が社会に果たすべき役割は大きくなるとみられ、労働需要も増加傾向をたどると予測される。

参考情報

- 関連団体** 社団法人 日本義肢協会
<http://www.j-opa.or.jp/>
- 関連資格** 義肢装具士国家試験 義肢・装具製作技能士